大泉高校新聞

【発行所】
東京都練馬区
東大泉5-3-1
大泉高等
学校生徒会
新聞委員会
電話（924）0318
〔発行責任者〕
2-1 伊藤なおみ

生徒の関心薄し

○……去る五月一日に、昭和六十年度前期生徒総会が開かれた。半ば定……○
○……例化してしまったという感じのする会であり、議題も例年とほぼ……○
○……変わりばえのしないものであった。また、六月十二日の執行委員……○
○……の選挙の場合も予定日の前日まで候補者は出なかった。一時は延……○
○……期される恐れもあった選挙だったが、一応予定通り行うことがで……○
○……きた。しかし、この時点では未だに会計候補が出ていない。……○

定期生徒総会

生徒会決算の承認とその他に一、二点の報告や承認だけで大まかなことは終わってしまった。そして新聞小委員会の予算に対する釈明といったものが、今回の生徒総会の大まかな内容であった。生徒の反応は非常に悪く、終始私語が絶えず、質問も出ないといった有り様で、これではただ事前にHRで説明される必要がある。

第二に、もっと身近な問題について話し合うことだろう。その方が生徒により関心をもってもらうことができるのではないだろうか。

しかし、なんといっても生徒の自覚がなくては駄目である。生徒一人一人が、自分がこの会を活気のあるものにする、という意気込みを持ってこそ、私語がなくなり、活気に満ちた生徒総会がつくられていくのであろう。次回の定期生徒総会を期待する。

＊＊＊＊＊＊

のおしゃべり会といったものではなかったろうか。

この様に私語ばかりが多く質問が出て来ない理由としてまずあげられることは、議題に対する各個人の理解度の足りなさだろう。それには生徒会役員側の説明不足だけではなく、生徒一人一人の自覚が足りないことも関連するだろう。ほとんどの生徒には、理解しよう、考えよう、という姿勢が全く見受けられない。

また、生徒の大部分は、この生徒総会が生徒会の最高議決機関であるとはっきり感じていないように思われる。

では、どうしたらもっと活気のある会が開けるのだろうか。

第一に、内容をもっと生徒に理解させることだろう。予算案や決算などは一般生徒には理解しにくい面が多いので、もそも敬語自体がないのであるが。）もちろん、「先輩」や「年上」という意識をもたなくても、相手がそれ相当の人物であれば、自然と敬意の念は抱かれる。そして視野を広げると、学校内でも年齢を意識しないでつき合えることから、〝友達の輪〟も当然広がる。

では、先輩やら後輩やらがない方がそれほど利点があるならば、我が校でもそのような制度を取り入れようじゃないか……と思う前に、先輩・後輩制の良い点も考えてみよう。

新学期に入って、昨年度先輩だった3年生はクラブから引退した。そして昨年度一年坊主だった2年生がクラブでは最上級生となった。今の2年生は、先輩たちが引退した時どう感じただろうか。ただ単に〝寂しい〟〝悲しい〟だけではなく、その後、部活動をしてみて何か〝気が抜けた感じ〟〝物足りなさ〟を感じたのではないか。それは、先輩たちがいなくなって、頼れる者がいなくなったと思うと同時に、今まであったある程度の緊張感がほぐれてしまったから感じたことなのだろう。つまり、目を光らせている先輩がいないと、自分たちはいくらでもだれることができてしまうのである。

でもそれはできない。もし自分がそうすれば、後輩たちもまねてしまう。後輩にしっかりしてもらうには、自分がかりしてもらうには、自分がその見本とならなければいけない。―そう思うことによって、初めて先輩としての「自覚」が生まれる。そして自分の行動・態度を自らチェックし始めるのだ。だから先輩となった者は、年齢が一つ増したことだけでは説明できない精神的な強さをもつようになり、一歩成長するのではないだろうか。

最後に、記者は個人的感情は別にすると、先輩・後輩制の有無についてどちらが良いとはいえない。ただ、読者にはこの制度について、あたり前のこととして受け入れてしまうのではなく、その存在を改めて考え直してほしいのだ。

（N）

論説 先輩・後輩

新入生諸君、入学おめでとう。諸君の中には第一志望の大泉に受かって、大手を振って桜並木道を毎日登校している者もいれば、すべり止めの大泉に入学して、未だに本望の高校に未練を抱いている者もいるだろう。いずれにせよ君たちはこの大泉を好きになり、大泉に誇りを持つようになるだろう。これは、同じ思いを経過してきた先輩たちが保証してくれることだ。

「先輩」―初めて部活、特に運動部に入った一年生は、この言葉を聞いて何を想像するだろうか。「先輩とか後輩とかに区別しちゃうと固っ苦しくて楽しくない。」「後輩は先輩に言いたいことを言えない。」「先輩は後輩にすぐ雑用を押しつけてずるい。」「人間は平等なはずなのに、どうして一学年違うだけで先輩ってこう有利なのだろう。」……数え上げるときりがない。あるいは、中には先輩・後輩の区別がなかったら、部活動にけじめがつかず、ばらばらになってしまうと思う人がいるかもしれないが、しかし必ずしもそうなるとは限らないのではなかろうか。外国の学校を見ればわかることだろう。

知らない人もいると思うが先輩・後輩制は日本だけのものなのだ。外国、特にヨーロッパ、アメリカでは、学校内とは限らず、社会に出ても年上の人とは気軽に話せる。（そ引退した。そして昨年度一年坊主だった2年生がクラブでは最上級生となった。今の2年生は、先輩たちが引退した時どう感じただろうか。ただ単に〝寂しい〟〝悲しい〟だけではなく、その後、部活動をしてみて何か〝気が抜けた感じ〟〝物足りなさ〟を感じたのではないか。それは、先輩たちがいなくなって、頼れる者がいなくなったと思うと同時に、今まであったある程度の緊張感がほぐれてしまったから感じたことなのだろう。つまり、目を光らせている先輩がいないと、自分たちはいくらでもだれることができてしまうのである。

でもそれはできない。もし自分がそうすれば、後輩たちもまねてしまう。後輩にしっかりしてもらうには、自分がかりしてもらうには、自分がその見本とならなければいけない。―そう思うことによって、初めて先輩としての「自覚」が生まれる。そして自分の行動・態度を自らチェックし始めるのだ。だから先輩となった者は、年齢が一つ増したことだけでは説明できない精神的な強さをもつようになり、一歩成長するのではないだろうか。

最後に、記者は個人的感情は別にすると、先輩・後輩制の有無についてどちらが良いとはいえない。ただ、読者にはこの制度について、あたり前のこととして受け入れてしまうのではなく、その存在を改めて考え直してほしいのだ。

（N）

執行委選挙

去る六月十二日に執行委員の選挙が行われた。

今回の選挙は予定日の前々日になっても立候補者が一人も出なかったので、どうなることかと思われたが、再三にわたる放送での呼びかけ等によって、予定日の前日には会長候補、副会長候補各一名、無任所候補二名の計四名が立候補したので、選挙は予定通り行うことができた。

選挙の結果、立候補した四名が全員当選した。

当選者のクラス・名前・信任率は次の通りである。

会長　井上一志（2―3）　七七・一％
副会長　渕上　敏（2―8）　七一・五％
無任所　南沢満紀（2―3）　六二・八％
〃　新倉康巨（1―3）　七七・六％
（信任率60％以上で当選）

今回の選挙は一応無事に行われながらも立候補者が規定人数に満たず、立候補すれば当選するという感じだった。このような状態から見ると、大泉生のやる気のなさが感じられる。今回当選された四人は、こうした状態を改善すべく、ぜひとも頑張ってほしい。

任期を終えて

元生徒会長　高野克之

文実の団体局長をやり、何のはずみか思い違いか、調子にのってしまい、生徒会長までやりました。予定外の仕事もあり大変でしたが、今、任期を終えて思い返してみますと、様々な反省事項や考えてみたい事が思い起こされます。

まず、自分自身、執行というものを理解するのにかなり時間がかかり、任期を終えた今も理解しきったとは言えないでしょう。そのために、なかなかそれらしく仕事ができませんでした。ただ、理解するという点に於いては他の皆も同じで、完全に理解しきっている生徒は、学校全体でみても始どいないと思います。それがたたってか、どうも執行というのは雲の上の存在という印象があるようです。それに輪をかけて、直接選挙による選出というのがあるせいか執行離れがひどくなっています。だいたい、生徒会の中枢である執行をやる人がいないというのはかなり考えものです。何を勘違いしているのか同格である生徒委員にはなっても、執行委員にはなろうとしません。最近、生徒委員もたるんでいるのか、自覚が足りないのかどうなのか知らないけれども、委員会を平気でさぼる人がいますし、時間通りに集まる人もほとんどいません。はっきり言って、2年生の出席率、態度が一番悪いです。学校の中心となる学年がそれでは困ります。話を元に戻しますと、執行をやるとの難しさを実感し、会長として情けない部分をさらけ出したことを反省しています。

この場に及び、ごたく並べても仕方ないので、（さんざん並べてしまったけど）後任の執行の活躍を期待し、皆、特に一、二年生が自分達のためだということをはっきりと自覚し、動き出すことを心から願っています。

増改築落成記念式典

増改築落成記念式典が去る6月22日に行われた。

当日は、午前中が多少天気が悪かったものの午後には晴れあがり、記念式典は午前10時より行われ、午後1時を30分ほど過ぎたところで記念式典を終了した。

記念式典の内容であるが、初めに学校長のあいさつがあり、そして来賓の方々の祝辞へと進んでいった。全日制・定時制の各生徒会代表の祝辞などは特に興味深く、皆の関心を集めた。

後半の記念行事では、本校の第六期生の日々野弘さんがラグビーを中心に講演してくれたが、さすがに早稲田大学の助教授だけおられ、たいへんおもしろく聞かせていただいた。

最後の記念講演会では、まずチェンバロ演奏があり、玉利夫妻の手によって、美しい旋律が奏でられた。学校のポプラの木で作られる玉利さん手製のチェンバロが完成するのを、特に音楽好きの生徒は待ちどおしく思っていることだろう。

しめくくりとして、第4期生の栗林義信さんによるバリトン独唱を聞かせていただいた。このかたはすばらしい実績の持ち主でおられ、曲目も「魔王」、「闘牛士の唄」など生徒にも親しみのある歌がほとんどで、皆は聞きほれていたようだった。

最後に全体を見て皆は、大泉生がいろいろな方面でご活躍されているのを見て、どう感じただろうか。それから、普段聞く機会のないものを聞かせてもらい、たいへんよい体験をさせてもらって、我々在校生は本当に恵まれていると思った。

記者席

生徒の意識

最近の大泉高は低迷しているように思われる。それは生徒の意識というものがないからだと感じられる。生徒の意識についてもういちど考えなおしてみるべきだろう。

去る5月1日、定例生徒総会が行なわれた。それについて言うならば、生徒の関心は薄く、予算案承認についても質問が出なかったのは、おそらく本当によく考えている人がいないせいではないだろうか。さらに、一年生にとっては驚きであったろうが、総会壇上においての本題からはずれた「言葉づかい」についての多少の口論も、意識不足が招いたことであろう。さらに、二月の生徒総会でも5月発行の大泉高校新聞に書かれていた通り、低迷の域をぬけだせないでいるという思いが強かった。そして6月12日の執行委員選挙においては、立候補者はたったの四名だった。また、一年生は集まりが相当悪く、校長先生にまで注意をいただいたほど。最も自覚が足りない人は横になって寝ている、ということもあった。

これらの例から考えても生徒は関心が低くて、さらに自覚不足などが加わって学校活動の低迷を誘う結果となった。これら学校生活においての活動がおろそかになると、将来、どのようになって行くのか先行きが危ぶまれる。

このような事が長く続くと、生徒の考え方が生徒会に反映しなくなり、生徒以外の手によって動かされる、なんてことになりかねない。もう一度、生徒の意識について考えなおしてみるべきだろう。

路標

中・高校時代に誰もが楽しみにすることといったら、学校行事であり、一学年全員が一緒に行く宿泊を伴う修学旅行などではないだろうか。大泉高校にも高校三年間のうち、宿泊を伴う、一学年全員が参加する旅行が二つある。臨海学校と、修学旅行に代わるHR合宿である。ここでは臨海学校について話をしよう▼今まで学校にプールのなかった大泉高校では、毎年期末試験終了後の試験休みを利用して、石神井高校のプールを借り、四日間くらい班分けを兼ねた水泳訓練をしていた。これで誰もがもうすぐ臨海なんだなあ、という感覚をもったのではなかったろうか。今年はプールが出来たため、授業でも水泳があり、また試験休みも水泳訓練がありそうで大変だなあと感じる。▼しかしその訓練は、能力を見ると共に、生徒へのもうすぐ臨海ですよ、というメッセージとして受け取れば良いのではないか。そして、助教もその時少数ではあるが、参加するので顔を覚えておいたりして臨海の雰囲気をつかんでも良いだろう。▼臨海の歴史に少しふれてみることにしよう。昭和三二年に第一回の臨海学校が始まった。この時は希望者のみのものとして始められた。参加者は三二名であったらしい。昭和三八年に一年生が全員参加という形になった。助教も全員参加となってからお願いをする様になり最初の頃は、卒業生の他に学芸大などの水泳部の人も来ていたそうだ。それも昭和四二年以降は、多くの立候補や推薦のある中から体育科の選んだ卒業生のみとなったらしい。▼今年で二八年目となる大々的な行事である。一年生は、新しいクラスに慣れる意味も兼ねて大いに楽しんで来てほしい。

'85 燃えた体育祭

競技

去る五月十二日、体育祭が行われた。快晴の空模様の下で、さすが〝大泉〟だと言わせるぐらい非常に充実し盛り上がった。

種目ごとに見ていくとやはり、リレーに関心が集まり、最も盛り上がったように思えた。しかし、スタートの合図が聞こえなくてちょっとしたハプニングも起こったので、来年からはしっかりしてほしい。

また持久走もすごかった。特に男子は出場者も多く、走る距離も長いのでスケールの大きさが感じられた。

組体操では二年生が良かった。最初から高度な演技を披露するので見ごたえがあった。特に最後の〝人間ドミノ〟は「オー！」や「すごい！」などの歓声が、あちこちから聞こえてくるほど実にいい内容だった。

三年生の女子による民謡も素晴らしかった。浴衣を着て踊っている姿は色気を感じさせ、大人の魅力に目を引かれた。

今回の体育祭で、悪かった点を挙げると、棒たおしや騎馬戦などで、暴力行為などの反則があったこと。それに、開会式は生徒の態度が良かったけど、閉会式になると、話をしたり、体操体系に開く時も、だらだら歩いていた。これでは、先生達や来客の人から見ると、「もっとしっかりしろ。」といったような気持ちになるだろう。それと、閉会式の順位発表の時に、一年生のところで初めは、一位・一年十組と発表した。しかし、後になって、一位・九組、二位・十組と訂正した。なぜ、順位発表で間違えるのだろう。得点の計算なども、それほど難しくない。それに、優勝のトロフィーや賞状は、初め十組に送られた。これでは、九組の生徒はかわいそうだ。それと、十組の生徒も優勝した気分で盛り上がっていたのに後から二位だと言われて、がっかりするだろう。

以上のような悪い所を反省して、来年からは注意してほしいものである。

赤組男子応援団

体育祭当日、カラフルな衣装を着てダンスを披露してくれた女子応援団がグラウンドを去り、彼女らと入れ代わりに男子の援団が登場する。体育祭のヒーロー達参上、といったところである。

体育祭前日に記者は赤組男子援団の取材をした。場所は放課後の校庭である。

前日だけあって緊張が感じられ、足並みをそろえること、顔の表情をくずさぬことなどに細心の注意を払っていることがうかがえた。また、後で聞いたことだが恥ずかしさを捨て、まじめなところはまじめに、ふざけるところは思いきりふざけることに注意していたようだ。しかし、援団のOBに話を聞かせてもらうと、彼らはスピリットには充分気をつけているにもかかわらず男子援団は年々迫力がなくなっているそうだ。タイミングや振りつけなどを早く覚える反面、肝心の迫力が欠けるらしいのだ。また、最近はのっぽ型の団員が増えているのに対し、柔軟性を持つ人が減りコンパクトにまとめやすいのだが、前日の練習にならない限り、〝のり〟を見せないとのこと。

さて、体育祭当日になって彼らの応援ぶりを見せてもらったのだが、赤組男子援団はオリジナルダンスとして「ピンポンパン」、「あの娘とスキャンダル」などを踊ってくれそれらのかなりユニークな振りつけなどで、人目をひきつけていた。援団レースの方でも2位と好成績をおさめた。

ところで、団員の言う通り「本番がきまった」せいか、援団優勝は赤組が勝ち得た。

体育祭後に、団員に援団をやってみてよかったことを尋ねると、やはり友達ができ、体育祭を一番エンジョイできることだそうだ。また、優勝が決まった瞬間の喜びは人一倍大きく、優勝した援団ならでは感じられないことで、赤組男子の援団をやって本当によかったそうだ。

最後に、赤組の援団の皆さん、優勝おめでとうございます。この一年間応援を頑張って下さい。

赤組女子応援団

この度優勝した赤団の女子は声の大きさと女の子のかわいらしさをアピールとしていた。特に気を遣ったことは、お客様へのサービスを念頭において笑顔をいつもたやさないこと、顔はいつも前向きにし、踊りはかわいらしく、きめるところはばしっときめるなどだそうだ。練習中には、今あげたことの他、指先までへの配慮や腰のふらつきなどへの注意がみられた。練習のちょっとした合間にもだらけた様子はみられず、お互いに注意し合っていた。

ところで、注目の的である衣装についてだが、赤無地とギンガムチェックを素材に、肩を少しのぞかせ、ギャザーを多くとったりして、キュートなイメージを出していた。

体育祭当日は、いつも笑顔で、疲れた様子も見せず、それまでの努力がまさに花開いたようであった。また、記者は、この団を見ていて、和やかで居心地の良さそうな雰囲気を感じた。というのは、三年の中心の人達も皆に親身になって教えたりしているのがわかったし、ちょっとした会話にもやわらかさがあったからである。練習中のかけ声、〝優勝はもらったぞーあ・か・ぐ・み!!〟の言葉どおりになって喜びもひとしおだったことだろう。

最後にこの団のある二年女子の言葉を書きとめておこう。

―当日の派手な陰にそれまでの地道な努力があるのです。我が団はアットホーム的で三年の人達は優しくて最高だしみんなも一生懸命取りくみました。衣装もトップの裁断は先輩がやってくれたんですよ。自分自身では、ギャザーを自分のウェストまで縮めるのに苦労しました。それと、援団に入って視野が広がったのも大きな収穫でした。―

白組男子応援団

私、記者Mは、白組男子の応援団の取材をした。応援団と聞くと敬遠する人が多い様だが、現に私のクラスでも援団を選出する際、大分手こずってしまい仕方なくやった者もいたようだった。しかし私の目から練習風景を見た限りでは、そんなことは少しも見受けられなかった。

さて練習内容だが、これは各色組ともほとんど共通で、エール、ガン、コンバットマーチ、アクロバット、空手、そして校友の歌などがあったがアクロバットは当日できなかったそうだ。中にはユニークなものもあり、一般生徒にも結構うけていた様だった。

練習場所は、玄関前、屋上、教室などで、昼休みや放課後になると校内のあちこちから大きな声が聞こえてきたものだった。

練習風景は先にも述べたように、大変まじめで真剣に取り組み、またOBに再三注意されてもめげずに頑張っていたようだ。

体育祭が終わってから数日後、私は白組応援団長の水谷君にインタビューした。今援団の皆に対して言いたいことは？という質問に彼は、「皆一生懸命やったのに優勝できなくてとても悔しい。来年は今年以上に頑張って欲しい。」と答えてくれた。また、「確かに練習はおもしろくないしOBもうるさい。でもそれをやりとげた時の満足感、充実感のようなもので胸がいっぱいになり、ジワッときて感動する。これを一度味わってしまうと援団はやめられなくなる。それに当日はアッという間で、授業一時間よりも短かく感じる。とにかく援団は最高だった。」と付け加えてくれた。

練習最中に声が出なかったり、時間の規制があったり、人数が足りなかったことなどはもう問題ではない。〝応援団〟という一つのことをやりとげた喜びを体験した団員達を私は幸せに思う。きっと、高校時代に援団をやったことが一生の思い出になるであろう。最後に白組だけとは言わず全援団の皆さん、御苦労様でした。

白組女子応援団

ここでは、白組の女子（以後〝白・女〟と略す）に焦点をあててみることにしよう。

まず練習内容であるが、全団でエール交換、校友の歌、おうぎ他をやったあと、各団に別れたり男女に別れたりして、それぞれの練習を行った。

練習内容をちょっとでも見たことがある人は大体〝熱心だな〟という意見を持ったのではないだろうか。教室などで個人練習をしている団員を見たことがある人は、多数いると思う。

練習内容はこれくらいにして、次に白・女の人に聞いた感想をあげてみよう。

○交流が深められる
○毎日が明るく楽しい
○練習がきつい
○休日の練習はいやだ
○早く体育祭になってほしい

等があがった。むろんこれは体育祭前の感想であって、体育祭後はまた違う反省や感想があっただろう。しかし、やりとげたという充実感でいっぱいだったという。これは全団共通の感想だと思うが、オリジナルダンスなど白・女だけのものもあり、また少し他団とは違う満足感もあるだろう。それは実際にやった人にしかわからないものではないだろうか。

白・女のコスチュームは白とピンクを組み合わせたもので、評判は〝かわいい〟となかなかよかった。来年も期待したい。

全体的にみると、欲をいえばきりがないが実によくやってくれたと思う。

青組男子応援団

三年連続優勝を狙った青組応援団。残念ながら優勝にはならなかったが、彼等の一生懸命な練習は、他のどの組の応援団にも負けず劣らず、ハードなものであったろう。始業前・昼休み・放課後をフルに使って「エール1・2」・空手・校友の歌などの練習をしていたのである。

記者は、ある晴れた日の昼休み、二号棟の屋上で青組男子応援団を取材した。十数名の団員が、団長の指揮の元に「エール1」を練習していた。まだ五月とはいえ、黒い学生服を着て全身運動をしている団員達は、皆、汗を流していた。彼等が一心に出す大声は一階の教室にまでも聞こえてくる位だから、近くで聞くとその迫力は大したものであった。

団長は、三年生の古谷紀彦君。応援団全体の総団長も兼ねている。今年は一年生が多いので嬉しいそうで、総団長のリーダーシップを活かして、うまく一年生をリードしていた。記者が、写真撮影をしたい旨を伝えると、団長の鶴の一声で、全員が一ヶ所に集合した。団員同士の結団力も大したものである。小休止の時に、まるで前々からの友達同士の様にふざけ合ったり、お互いに仲が良さそうな事も印象に残った。

体育祭当日、彼等は前述の応援を一心にやった。生徒席もそれに答えて盛り上がっていた。やはり、この盛り上がりは援団抜きには有り得ない。

優勝にはならなくても、体育祭の盛り上がりに大きな役割を果たした彼等に、ここで大きな拍手を送りたい。

青組女子応援団

一昨年、昨年と連続優勝した青組。その蔭には、援団の力が大きかったのではないか。

そこで、去る5月11日、体育祭前日に青組女子応援団を取材し、練習を見学させてもらいながら、チーフに話を聞かせてもらった。

それによると、今年は人数が不足気味で、日数も去年より少なかった為、休日をつぶして登校し、練習したそうだ。また、ダンスの振り付けや発声などにも非常に苦労したということである。青のコスチュームは、「さわやか」をイメージし、シンプルかつ流行を採り入れ、その上男子の目を楽しませるものを考えたとか。今年の一年生については「まじめだが、気迫が今いちだそうなので、一年生にはもっと気合いを入れてほしい。最後に、今年の抱負を聞かせてもらったが、「とにかく、盛り上がらせたい！」とやる気満々だった。

一・二年の団員からも話を集めてみると、「土方焼けする」「先輩は面白いが、練習がきつい。」など、苦労話が多かった。だがそう語る彼女達の顔はとても明るかった。

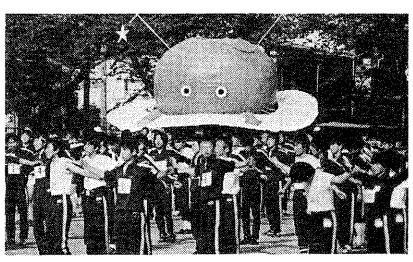
練習の方は、さすがに前日だけあって、踊りも息がぴったり合っていて、一般の生徒とは比べものにならない意気込みが感じられた。

当日には、青と白のコスチュームで広い場内を駆け回り、今までの成果を披露していた。青組のオリジナル・ダンスは「ポップ」と「ふられ気分でロックンロール」の2曲で、音楽に調和した個性的な振りが印象的だった。

さて、援団といえども、競技にも参加しなければならない。そんな時は、マスコットの中で衣装から体育着に着替える。

華やかな表面の裏には、努力と汗があるのだ。

最後に一つ気になった事があった。それは、当日、援団の中に、「援団が忙しい」といって、競技に参加しなかった人がいたことだ。大変なのは理解できるが、良くない事だ。



マスコット

今年のマスコットは赤組キン肉マン、青組コスモ星丸、白組塩沢トキであった。体育祭前には天候に恵まれず、本当に仕上がるものかと心配されたが、体育祭当日、例年に勝るとも劣らない出来のマスコットたちが、青空の下に姿を現してくれた。特に優勝したコスモ星丸など輪まで入念に作られており、生徒の手でここまで出来るものかと驚かされた。

これほどのマスコットを作り上げるにはどのような苦労があったのだろうか。あるマスコット委員にインタビューしてみたところ、「人手が足りなくて困った。出る人はきちんと出てくるのだが、出ない人は全く出て来ない。」という返事が返ってきた。今までは〝マスコット委員会はさぼれる委員会〟という意識が定着してしまっていた。今年は先生方もかなりきびしく徹底させようとしていたようだがいったんついたさぼりぐせはなかなか抜けないらしい。それから、作業中の委員が脚立から落ち、倒れてきた脚立が頭にぶつかってけがをする事故などもあった。

記者個人としては、たかが一日で終ってしまう体育祭の為に汗水たらすなんて、という気がしないでもないのだが、たとえどんな理由にせよ委員会に入った限りは、責任感を持って全員が協力してほしい。もしもそうできたならば、さらに素晴らしいマスコットが完成するにちがいない。

こぼれ話

マスコット

昔のマスコットは、もっとしっかりしていた？昔のマスコットは木の組み方こそ今と同じだが、新聞紙をもっと幾重にもしていたらしい。だからもっと迫力があった。それに新聞紙の重ね方が厚いので中の竹組みも見えないで、もっときれいだったらしいのだ。今は人手が足りない事を理由に、作り方が安易になっているみたいなので委員の人、もっとしっかりして下さい!!

男子って　女子って　わからない?!

共学である大泉では、生徒は異性と常に接していなければならず、楽しい反面、いろいろと異性に対する疑問を抱くようになるだろう。そこで我々スタッフは、大泉生を対象に、異性に対する意識調査を行った。その一部を表にしたのが左と下の図である。この図について考察を述べよう。

図1―一年生が二・三年に比べて友人と深刻な話をする割合が少ない（一年43%・二年63%・三年65%）のは、まだ友達とのつき合いも短く、親密でないのと、他の学年に比べてそれほど真剣に考える機会が少ないためと考えられる。男女間で比較するとそのような話をする割合が、図から男子の方が少ない。これは、男子の方がすぐにシリアスな話題を出したがらないのと、やはり女子ほど日ごろから考えてないからだろう。

しかしシリアス〝度〟は男女とも異性ではなく同性を基準にしてアンケートに答えてくれたので、結果的に現われた数字だけでは一概に両性を比較できない。

例えば、記者が男女両方を相手に話した経験からすると女子は自分の将来を語る時、ほとんどの人が漠然としたイメージしか抱いていないことがわかる。―「お嫁さんになりたい」といっても彼女らが思い浮かべるのは、白いエプロン姿でクッキーを焼くこと、大勢の子供達の笑い声につつまれた明るい家庭、新婚旅行はハワイへ……。その点、多くの男子は女子よりは現実的で、しっかりした考えをもっているといえる。

要するに、女子はふだんから〝真剣〟であっても、男子から見ればその真剣さはかなりあさはかに思えるに違いないのだ。

図2―異性のどういうところにひかれるか質問したが、他の学年よりも、一年生は相手の表面的なところ（顔、スタイル等）にひかれると答えてくれた割合がやや多かった。ただし、表面的な魅力の中には〝笑顔〟など内面から生まれるものも含まれていた。尚、この表の〝その他〟の中には〝雰囲気〟という答えが多かった。これも本当は服装や髪型では作れなく、やはり内面からのものであろう。

図3―男女のどちらから告白するべきかという質問について、男女の考え方の相違は一目瞭然である。また、一年のうちは〝女子から〟が15%を占めているが、この意見のほとんどは男子からのものであった。これは、回答者が男女の立場を充分に考慮した上で出た結果というより、〝相手から〟という意識が強く、かなり受身になっていることがわかる。

図4―どのようなつき合い方を望むかという質問に対して、全体的に軽いつき合いを求めているようだ。特に、三年の〝深く・長く〟が0%なのだが、これは受験の影響のようだ。それでも記者は、年齢が増すにつれ、結婚につながるような深いつき合いをしたくなるものだと信じていたので、結果を見て少々驚いた。

男女間のつき合い方の願望の違いは、具体的にいうと、男子の〝その他〟の中に性交的なことがずい分含まれていたのにひきかえ、女子のにはそれがなく、男子より軽い交際や友人のような交際を多く望んでいるらしいという点にある。しかし、それはたてまえだけであって、本当はそう思っていないのかもしれない。

ところで、以下の図に記されているものの他にもいろいろと質問をしたのだが、その中のいくつかをあげてみよう。

第一に、異性の服装についてどう思うか、と質問してみたところ、

○別に気にしない
○その人に合っていれば良い
○清潔なら良い
○ミーハーなのはきらい
○女子はミニスカートをはいてほしい

といった答えが多かった。しかし、男女の中性化が目立ってきている今日この頃、もっと〝男らしさ〟あるいは〝女らしさ〟を求めているのかと予想していた記者は、そういう意見が一つも出ないのを見て、少し驚いた。では、今の男女は、〝男（女）らしい〟格好というものをあまり意識していないのだろうか。

第二に、どんな親、夫や妻になりたいかという質問に対して、答えは十人十色だった。例をあげると男子では、「優しい」、「家庭を大切にする」、「若かった時の考え方を忘れない」、「理解力のある」父や夫になりたいという答えがあり、女子では「良妻賢母」、「子供と何でも話せる母」、「尽くす妻」、「子供の前ではけんかしない親」、「自立する女」などがあった。これらのほとんど全てに亘って、家庭を大切にする気持ちが現われている。また、これらの答えが、回答者の現在の家庭状況を反映している（反発している）ということもある）ことを念頭に入れて読み返すと、興味深い。

さて、ここまで大泉生の意識の仕方などを述べてきたのだが、読み終わってみて、お互いの理解を深めるのに役立っただろうか。この記事が何らかの形で参考になれば幸いである。

ところで、記者がこの記事を書こうと思い当った動機は昭和三十六年、第58号大泉高校新聞掲載の記事、「苦言交換」を読んで興味をひかれたことであった。この「苦言交換」とは、当事の男子から女子、女子から男子への苦言とその返答を入れて構成されたものである。しめくくりとして、その一部を抜粋しよう。

男子→女子

Q どうして女子は、標準服以外のものを着るんだろう。紺色だったらまだ感じがいいのに、色彩豊かに飾りたてて。美的感覚0だな。

A 確かに学生は学生らしい服の方がいいと思うわ。でも、この学校にそんなにハデな格好の人っていないわよ。美的感覚0とは失礼だわ。男子こそ少し無神経すぎるわ。

Q 女子の話ってくだらないね。服装時評だとか、食うものの話ばかりでさ。しかも、何時間たってもペラペラしゃべりっ通し。まったくあれには驚くなあ。よく話題が尽きないね。字にもあるだろ、女子が三人集まって「……」さ。意味を知っているかい？少し気をつけろよ。

A それはごめんなさい。でもくだらない話ばかりじゃなくってよ。深刻なことは男子のいないところで静かに話すの。「おわかり？」

女子→男子

Q 一般の男子校の男子に比べて、男らしさがなくなっているみたい。色のズボンはいたり、ネチャネチャしたり。古い先輩曰く「僕らは未来洋々たる学生生活を謳歌し、理想に燃えていたね。」って。どうこの態度？

A それは見解の相違というもの さ、昔も今もたいして変っていないんだよ。ただ女子の活発化で、男子がそう見えるんだろう。確かに、男子の中には軟派な奴もいるけどそれは極少数であり、殆んどの男子は大きな理想を持ち、昔とちっとも変ってないんだよ。つまり、紳士的になっているんですな。

Q〝大泉の女子にきれいなのはいない〟とか〝ネリマダイコン〟とか言わないでちょうだい。私立の女子に比べて、私達には個性的な美や知的な美があるのよ。男子の美人論にはあきれて物がいえやしない。容姿端麗なのが必ずしも美人じゃないのよ。

A ネリマダイコンって沢庵にするんで、本当は細いんだぜ。ただ、そういう時に、自分達の足を想像するかは知らないけど。いや、女子の美人論の意気で数学や英語をどうぞ。

実に立派です。自分達に関係ある事柄はよく考えるね。そ

図1　友人と深刻な話を…

	1年	2年	3年	男	女
する	43	63	65	46	65
しない	49	29	29	43	30
無回答	8	8	6	11	5

図2　異性のどんなところにひかれるか

	1年	2年	3年	男	女
表面的	33	22	22	33	23
内面的	39	53	51	36	56
その他	15	18	15	17	15
無回答	13	7	12	14	6

（数字は%）

図3　告白は男女どちらから？

	1年	2年	3年	男	女
男から	35	39	40	23	53
女から	15	7	5	18	2
男女どちらからも	22	24	31	29	20
無回答（その他）	23	30	24	30	25

図4　交際はどういう風に？

	1年	2年	3年	男	女
友達のように	4	14	20	3	20
浅く楽しく	51	33	32	36	44
深く長く	9	7	0	6	6
その他	19	28	24	28	19
無回答	17	18	24	27	11

（数字は%）

御苦労様　教育実習生

5月半ばから6月初めまで教育実習生が我々を教えて下さった。その中にはベテランの教師のように堂々と振舞っていらした先生や、緊張のために黒板に書く字が震えていた先生など様々だった。ここではこれらの先生の中で、体育科の教育実習生、5人を紹介したい。

まず初めに紹介するのは、写真では中央の高橋啓子先生。

すでに知っている人もいると思うが、先生は国体で2位という実績の持ち主のハードルの選手。また、先生は今年の夏、神戸で開かれる、いわゆる学生のオリンピックに出場される。これは国際的な催しで、出場権を得るのは非常に難しい。先生いわく「この2週間というもの教育実習の為、あまり練習できなかったのだが、この大会の予選で自己最高記録を出したことは自分でも信じられない。とっても嬉しい。」

写真で左端の佐賀先生は現在筑波大体育専門部の4回生。

先生の出身校はあの甲子園大会で有名なPL学園で、現在巨人軍の吉村選手と同級生だったそうだ。

佐賀先生は特に剣道が得意だそうで、インターハイで2位、昨年は学生剣道大会で優勝なさったという実績からも先生の腕前がうかがえる。

先生は、生徒と友達のような教師になりたいそうだ。

右から2番目の飯野先生は筑波大体育専門部の4回生である。飯野先生は言葉に少しなまりがあって、とても感じよく、親しみやすい先生だった。

1年生は保健体育の授業をしていただいたのだが、授業は教科書にそわず、先生が作成されたプリントを使い、とても楽しかったので、50分があっという間に感じられる程だった。

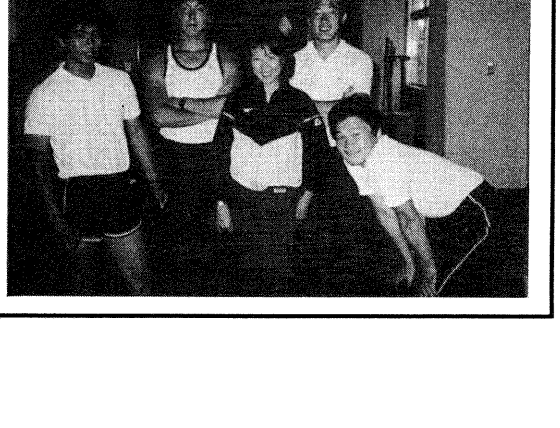
先生は気合いの入った先生になりたいそうだ。

〝クラブでは、トレーニングとおさわぎとはしっかり区別する〟をモットーとする上田先生。（左から2番目）先生も現在筑波大の4回生で、投げやりが得意。

先生は、教師という仕事をしてみて、教えられる側よりも教える側の方が大変だと初めてわかったそうだ。そのためか、先生は将来高校の先生になるつもり、と話してくれた。最後に上田先生からの一言を加えておこう。〝はったりでもいいから、こそこそしないでぶつかってほしい！さめないで!!〟

ラストバッターの宮田先生は、5人の中でただ一人日体大から実習にいらっしゃった。（写真では右端）専門は水泳である。また、先生は大泉出身なので大泉の印象を聞いたところ、〝きれいになったし自分が卒業した後にプールができたからクヤシイ〟と答えて下さった。この先生は保健の授業をする時にはひどくあがってしまうらしく、いつも授業中〝カンニング〟をしていた。読者は先生の腕に授業の要点が秘かに書かれてあったのを見ただろうか？

以上で5人の先生の紹介を終わる。最後に、彼らが共通しておっしゃった大泉の印象は、〝生徒に活気がない〟ということだ。また今度会う時は、本当の教師になっていることを期待しよう。



他校訪問

都立西校

今回の他校訪問は、都立西高校を訪ねた。西校は井ノ頭線、久我山駅から徒歩で約10分くらいのところにあり、正門をくぐると、愛の泉という池の奥に、古いレンガ造りの校舎がある。その校舎の横にはグランドピアノの形を型どっているユニークな図書館がある。この図書館は二階が図書室で、一階が生徒会などの委員会室となっている。この二つの校舎をぬけると、広々とした校庭がある。この校庭は、生徒達に西校砂漠と呼ばれ、風が少し吹くと砂ぼこりをまきちらすそうだ。

西高に行ってまず感じることは、学風がとても自由であり、またクラスや学校全体がとてもよくまとまっているということだ。

ところで、我々がこの高校に行ったときに、クラスマッチという行事をやっていた。これは、六月に二週間、年二回行われるクラス対抗の球技大会のことで、駅伝、ハンドボール、バスケットボール、卓球、ソフトボールの4種目の中から男女それぞれが三種目を選んで、クラスごとに競われる。また、この時、大半のクラスがクラスごとにTシャツをつくったりし、スの団結が高まる。

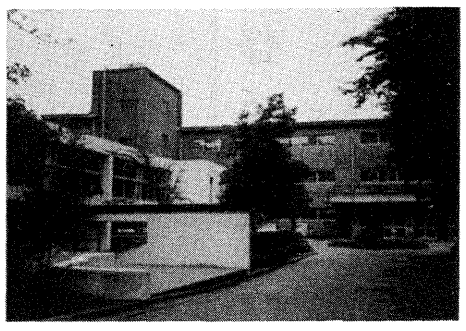
その他、大きな行事では記念祭があり、模擬店こそないが、ほとんどのクラスが映画などを作り、また部や同好会も参加し、盛りあがるそうだ。また運動会もあり、この時は、昼休みにクラス対抗で仮装大会を行い、優秀なクラスには賞が与えられる。

次に学習面では、二年生で希望者には、独語か仏語が選択できるほか、一・二年生は夏休みと冬休みの休みあけに二回、三年生は年四回の実力テストがあるそうだ。

ところで、部活動は、ほとんどの運動部が夏に合宿を行い、校内にある西校会館という場所を使って合宿する。また珍しい部活としては、アメフト部、百人一首同好会などがある。

以上が西校で取材してきたことだが、この高校に興味をもった人は、記念祭にでも行ってみてはどうだろうか。

最後に、西校新聞部の方々、御協力ありがとうございました。



文芸欄

映画　蜻蛉のようにはかない　さびしんぼう

――ひとがひとを恋うるとき、ひとは誰でもさびしんぼうになる――

山中恒原作「なんだかへんて子」の映画化されたもので、「転校生」「時をかける少女」と並んで、「尾道三部作」と呼ばれている。

前二作と同じ大林宣彦監督の出身地広島県尾道市が舞台だが、前二作と異なるところは、冬の尾道が描かれているところである。

カメラが趣味の、西願寺のひとり息子、井上ヒロキ（尾美としのり）には、カメラの望遠レンズで近所の女子高をながめる（ヒワイなシーンではない。）という楽しみがあった。そこで放課後になると音楽室には、ピアノを弾く橘百合子（富田靖子）の姿が見えた。ヒロキは彼女を〝さびしんぼう〟と呼んでいた。

ある日、〝さびしんぼう〟と名乗るピエロの様な女の子（富田靖子）が現れた。〝さびしんぼう〟は、ヒロキの母のタツ子（藤田弓子）のことをまるで自分のことのように知っていた。ヒロキはそれ以来〝さびしんぼう〟に振り回されるようになった。そんなある日、ちょっとしたことから、百合子と話すチャンスをつかむ。

その後、百合子から、「もう会わないで下さい。」という手紙をもらう。が、「このプレゼントはその前に買ったものだから……。」ということで彼女に会ってプレゼントを渡し、別れる。ちょうどその日に、〝さびしんぼう〟は、「このあたしはね、十六歳のあたしなの。十七歳のあたしにはなれないの。」という不思議な言葉を残し、別れていく。

この映画の主題歌は、この映画と同じ題の「さびしんぼう（富田靖子唄）」だが、映画の中では、ショパン作曲の「別れの曲」が使われている。「別れの曲」の効果も大きく、題の通りのさびしい感じをとてもよく表現している。

全体として悲しい感じの映画だが、途中、ギャグも出てくる。美術面でも良い場面もあるが、ギャグとしての要素の方が強いようである。

三部作完結編ということもあり、要素は一、二作目を大きく引き継いでいる。だが、一、二作目と少し異った形式（一人四(二)役など）をとることにより、前二作とはまた違った面白さを引き出しているのではないか。また、大林監督は、「〝さびしんぼう〟は私のテーマであって、私が今までに作った映画、または、これから作るであろう映画全部に〝さびしんぼう〟という題をつけてもおかしくない。」と語っている。彼が、これからどんな映画を作り続けていくか、とても楽しみである。

興奮・熱気　N・レンジャーライブ！

ついにファンの期待に応えアメリカを代表するロックグループ、ナイトレンジャーが約2年ぶりに来日し、4月後半から5月初めまでステージ狭しと見事なライブを披露してくれた。記者Aは友人と連れ立って4月28日横浜文化体育館へ行った。6時半開演予定のところ6時に着いてみると早くも熱狂的ファンがお馴染みの黒い皮ジャンパー皮ズボン姿で並んでいた。体育館に入場するとどっと押し寄せてくる熱気があった。記者と友人はコンサートに行くのが初めてで雰囲気にのまれてしまった。

少々長い前座の後6時50分ぐらいから突然会場が暗くなり沈黙にさらされ、静かにキーボードの音がなり、曲名がわかった一瞬のうちに闇を引きさくかのようにギターが鳴り響いた。その時点で超満員の観客はすでに総立ちだった。

派手なオープニングからとあってすさまじいフィーバーぶりがうかがえた。コンサートは曲が進むたびに盛り上がりをみせ記者と友人はただ驚くばかりだった。なぜならこのグループとしてのまとまりも天下一品だが個々のメンバーのテクニックもまた素晴らしい。ここでグループのメンバーを紹介しよう。小柄ながら体全体を使いステージをリードする〝ジャック・ブレイズ（b・Vo）、そしてバンドの看板でもある2人のギタリスト、〝ブラッド・ギルス〟〝ディスペシャルII〟等SASの曲を、演奏してくれたが、SASの歌はやはりボーカルが難しいだけあってうまく歌いきれていなかったようだ。

2、3組目は、ほとんど女性だけのバンドで、佐野元春の〝SOMEDAY〟やC・ローパーの曲を歌ってくれたのだが、女性が多いということもあり、色気があったことは別に、声の出も悪く迫力もほとんど感じられなかった。

それに比べ、2年のバンドはすごい迫力であった。最初のパンクを初め、他の2組も、こなした曲はヘビーメタルと3年に比べたらものすごい盛り上がりを見せてくれた。記者個人としてはヘビーメタルは嫌いで、静かな曲を好む方であるが、この時ばかりは曲のリズムにのり、大いに騒いでしまった。観客も、特に2、3年は、ラストの方で非常に盛り上がった。ただ残念なことは、〝新歓〟にもかかわらず、1年生がしらけきっていて、内輪の人のみで盛り上がっていたように思えたことだ。

銀河系への案内

プラネタリウム、それは、円天井に星空を写し、見せる施設、日周運動・歳差運動・観測者の緯度の変化等に応じて、任意の場所・日時での星空を写すことが可能。また、晦渋な惑星の運動・赤経・赤緯の線・赤道・黄道・星座の絵姿・流星・彗星・薄明をも正確に投映し得る機能を備えている。

これから、中野文化センターのプラネタリウムについて書く。場所は、中野駅南口より、線路沿いの道を東に向かって直進、四・五百メートルの所。投映日時は、日曜日、十時半・一時半・三時半、土曜日、三時半。入場料、子供二十円、大人五十円。投映時間は、一時間。定員、二百三十名。先着順。四十分前から入場開始。

六月の話題は、はくちょう座であった。北の空に十文字に輝くはくちょう座は、大変美しく、北十字とも呼ばれる。一等星・白色のデネブをはじめ、その他六個の星からなり、新星がよく出る星座として知られている。また、このデネブと天の川を隔てて輝く二つの一等星アルタイルとベガを結ぶ二等辺三角形が、夏の大三角形である。このようなことを一時間に亘り投映し、入場料五十円をとる。非常に安い。

さて、プラネタリウムとは無関係であるが、流星がかたまって見られる日が年に何回かある。

八月十三日・ペルセウス(60)
八月二十日・はくちょう(8)
十月二十一日・オリオン(30)
十一月六日・おうしS(10)
十一月十一日・おうしN(10)
十二月十四日・ふたご(50)
十二月二十三日・こぐま(15)

（）内の数字は、一時間あたりの流星数。暇だったら空を見よ。あまり期待はできぬが。

新歓ライブ〟は内輪うけ

去る5月15日（とはいってもだいぶ前だが）、軽音同好会のライブが行われた。一教室半しかない会議室にもかかわらず、教室は熱気に満ちていた。

演奏はまず、3年のバンド3組がそれぞれ4曲ずつ披露した。最初のバンドは、男性だけで構成されており、曲はグループも観客も燃えつきたアンコール。素晴らしいステージだった。洋楽ファンにはもちろん、これからの人でもOK。一度ハードな感動を味わってみたらどう？

投書　燃えるものありますか？

皆さんは今、日々の生活の中で一生懸命になってやれることがありますか。また、希望をもって暮らしていますか。私は高校に入って、何かにうちこめるということは、すばらしいことだと強く感じました。

私達一年生が入学してからもう三ヶ月近くになります。入学した当時は、勉強やら部活動やらで、忙しくて仕方ありませんでしたが、最近やっと生活に少し余裕をもてるようになりました。それと同時に、私は何か、高校での生活に物足りなさを感じるようになりました。入学して間もなく部活に入り、筋トレに毎日励みました。友達もたくさんできました。先輩や先生方も親切にして下さって、毎日誰かと衝突することもなく、順調に過ぎてゆきました。なのにこの物足りなさは何だったのでしょう。

ところで、私は大泉の雰囲気がとても好きで、校門の桜並木などは特に好きです。また、高校生になると、友達のつき合い方が今までとは変わって、お互い衝突せず上手につき合うようになるみたいです。そしてこの自然の豊かな環境や、つき合い方は、大泉の自由でのんびりとした雰囲気をつくっているように思われます。

これは、私に心の安らぎをあたえる反面、とても退屈で、単調に思われたのでした。

毎日学校に来て、勉強して部活をして何事もなくその日を終えていく…。それはとても単調で、私に空白感を感じさせていたのです。

でも、今は違います。私の生活は部活を頑張ることによって意義あるものに変わりました。

部活は剣道です。前までの筋トレだけの練習から卒業し、最近は防具をつけて練習し始めました。そして、先輩と剣を交えているうちに、私は段々と剣道の魅力にひかれるようになりました。よし、練習はきついけど、もっと剣道を頑張ってみよう…そんな気持ちがわいてくるのを感じました。今は夏に向けて、練習に励んでいます。

こうして、私は剣道という目標と希望をもてるようになりました。

皆さんはどうですか。私はまだ剣道に自己の甘さがぬけず、本当に頑張っているなんてとても言えません。でも何かにうちこんでいくと、練習のことだけでなく自分のことを自然とみつめるようで、また同じ部活友達とは互いによく理解できるようになれるようで、何か大切なものを得ることができそうです。

皆さんも意欲と希望をもって、頑張って下さい。

（一年女子）

編集後記

★前回のY記者のその後を報告する。「視力回復研究所・石神井センター」に通ったところ、視力が一週間で〇・〇六から〇・一まで回復したと記したが、次の一週間で〇・三、次の週は〇・四まで回復した。このあたりから、回復のペースが落ちてくるそうだ。（念のため、広告費などは一切もらっていない。）

★最後になりましたが、写真部の皆さん、ご協力ありがとうございました。

★新小の人たちはご苦労様。でもまだ気を抜くのは早い！まだ仕事はたくさん残ってるんだゾ。次号もガンバレッ!!

〈この世で一番恐ろしいものが原稿の〆切り日だと悟った。〝鬼委員長〟より〉

青春雑感

安藤保

家とその弟子」を読む年ごろになっても、読めなかった。本が買えなかったのではなく、素養がなかった。いまでも素養がないと感じているが……。

今年雨期に入ってから、ある寺でひとつのことばに出会った。

「一人の親が、十人の子を養うことがある。十人の子が一人の親を養えないことがある」と。

生まれてから五歳ごろまで、それから国民学校卒業まで、それから中学校卒業まで、さらにおとなになるまで、母について内観してみた。そうすると母についてあれこれ言うよりも、いかに困難をのりこえて自分を育ててくださったか、筆舌以上の感謝の気持が身に満ちた。慈愛そのものである。

弟は老後の父母の面倒をよくみた。父の死を見とったのは弟であり、母の病いを老人病院に託したのも弟であった。早くに家を出、世帯をもった私はほとんどなにもしていないのに等しかった。

講談本を読めるようにして下さった小学校の先生、「指導算術」を使った私塾の先生、そして、受験で悩んでいるとき、はげましてくれた中学の国語の先生がおられる。今、ふたりの先生を除いて音信不通である。しかし、私の体と心の中で先生方は生きておられる。脈々として生きておられる。

父も母も今はいない。多くの先生は今はいない。しかし新しい師がおり、友人がおり、学校では生徒諸君がいる。

青春とは未成熟の時代と考えれば、私はいま、青春真只中である。

青春とは生命力の充実期と考えれば、いま、青春の真只中である。

「身体を鍛えるのと同じように柔らかい心を育てよ」

「限りなき御縁とおかげで生かされている」。

「最短距離を最高時速でつっぱしれ」。

「奉仕とはするのではない、させてもらうのだ」など。私に声をかけて下さる師が何人もおられる。

暖かいまなざしで許してくれる友人が多くいる。

大泉高校の卒業生・在校生諸君も一人一人、私にとってかけがえのないものである。

青春真只中、環境は大変よい。ここで自己究明に努め、脚下照顧を基としていきたい。人生はきびしい。

今は一人前の働き者になった弟が、若いころしばし逸脱したことをした。その度ごとに母は尻ぬぐいをしてまわった。弟の行いと態度、そして対する母の態度に私は大きないきどおりを感じた。

どうして弟は何べんも何べんも逸脱を繰り返し、家を乱すのであろうか。母はどうして弟にきびしくあたり、親としてもっとしっかりしないのであろうかと。

父は二十年余前に、母は十年余前に他界した。今は鎌倉の墓地で眠っている。私の母や、弟に対する気持ちは長い間固定し、変わらなかった。青春の一コマ、一コマは、輝きと楽しさに満ちているとは言えなかった。

国民学校六年生のとき戦争がはじまり、中学四年生のとき終った。物も心も飢餓の時代であった。戦争が終ってからも飢餓状態が続いた。阿部次郎の「三太郎の日記」や倉田百三の「出とがある」と。